

「サピエンス全史」(2/数回の予定)

文明の構造と人類の幸福

ユヴァル・ノア・ハラリ著

柴田裕之 訳

河出書房新社 2016年9月初版発行

2020年4月79版発行



(まんが版)

著者についての詳細は

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ユヴァル・ノア...>

ネットで「サピエンス全史」を検索しても、要約や図解が多数チェック出来ます。

(上巻)

第1部 認知革命

- 第 1章 唯一生き延びた人類
- 第 2章 虚構が協力を可能にした
- 第 3章 狩猟採集民の豊かな暮らし
- 第 4章 史上最も危険な種

第3部 人類の統一

- 第 9章 統一へ向かう世界
- 第10章 最強の征服者、貨幣
- 第11章 グローバル化を進める帝国のビジョン

第4部 科学革命

(下巻)

- 第12章 宗教という超人的秩序
- 第13章 歴史の必然と謎めいた選択
- 第14章 無知の発見と近代科学の成立
- 第15章 科学と帝国の融合
- 第16章 拡大するパイという資本主義のマジック
- 第17章 産業の推進力
- 第18章 国家と市場経済がもたらした世界平和
- 第19章 文明は人間を幸福にしたのか
- 第20章 超ホモ・サピエンスの時代へ

今回は第二部を要約してお届けします。

第2部 農業革命

- 第 5章 農耕がもたらした繁栄と悲劇
- 第 6章 神話による社会の拡大
- 第 7章 書記体系の発明
- 第 8章 想像上のヒエラルキーと差別

第二部 農業革命

第 5章 農耕がもたらした繁栄と悲劇

人類は250万年にわたって、動物の狩猟と植物の採集してきた。1万年ほど前にすべてが一変した。農耕への移行は紀元前9500~8500年ころ、トルコの南東部とイラン西部とレヴァント地方の丘陵地帯で始まった。それは地理的に限られた範囲でゆっくりと始まった。紀元前9000年頃までに小麦が栽培植物化され、ヤギが家畜化された。エンドウ豆とレンズ豆は紀元前8000年頃に、オリーブの木は紀元前5000年前までに栽培化され、馬は紀元前4000年前までには家畜化され、ブドウの木は紀元前3500年に栽培化された。・・・紀元前3500年までには家畜化・栽培化のピークは過ぎていた。今日、私たちが摂取するカロリーの9割以上は、祖先が紀元前9500年から紀元前3500年にかけて栽培化したほんの一握りの植物、小麦、稲、トウモロコシ、ジャガイモ、キビ、大麦に由来する。

かつて、学者たちは、農耕は中東の単一の発祥地から世界各地に広がったと考えていた。だが、今日では中東の農耕民が自らの革命を輸出したのではなく、他のさまざまな場所でもそれぞれ完全に独立した形で発生したといことで意見は一致している。・・・一地域で、大多数の人が農耕民になっていた。



かつて、学者たちは、農業革命は人類にとって大躍進だったと宣言していた。だが、この物語は夢にすぎない。人々が時間とともに知能を高めたという証拠は皆無だ。狩猟採集民は農業革命のはるか以前に、自然の秘密を知っていた。農耕民は狩猟採集民よりも一般に困難で、満足度の低い生活を

余儀なくさせられた。狩猟採集民は、もっと刺激的で多様な時間を送り、飢えや病気の危険が小さかった。平均的な農耕民は、平均的な狩猟採集民よりも苦勞して働いたのに、見返りに得られる食べ物は劣っていた。農業革命は、史上最大の詐欺だったのだ。

それは誰の責任だったのか？ 王のせいでも、聖職者のせいでもない。犯人は一握りの植物種だった。ホモ・サピエンスがそれらを栽培化したのではなく、逆にホモ・サピエンスがそれらに家畜化されたのだ。紀元前1万3千年頃、パレスチナのエリコのオアシス周辺では比較的健康で栄養状態のいい人々がおおよそ、100人から成る放浪の集団を一つ維持するのがせいぜいだった。ところが紀元前8500年ごろ、野性の草地が小麦畑に取って代わったとき、そのオアシスはもっと大きな1000人規模の村がやっていった。ただし、人々は病気や栄養不良にはるかに深刻に苦しんでいた。

狩猟採集民の生活集団が、自分たちより強力な集団に圧倒されたら、たいていは他所へ移動することが出来た。農耕民の村が強力な敵に脅かされた場合には避難すれば畑も家も、穀倉も明け渡すことになった。多くの場合、避難民は飢え死にした。農耕民はその場に踏みとどまり、あくまで戦いがちだった。村落や部族以上の政治的枠組みを持たない単純な農耕社会では、暴力は全死因の15%、男性の死因の25%を占めていたとする人類学や考古学の研究が多数ある。

一つの種の進化上の成功は、DNAの複製の数によって計られる。DNAの複製が尽き果てればその種は絶滅する。ある種が多数のDNAの複製を誇っていればそれは成功であり、その種は繁栄する。1000の複製は100の複製に常に優れる。以前よりも劣悪な条件下であっても、より多くの人を生かしておく能力こそ農業革命の神髄だ。正気の間人なら、わざわざ自分の生活水準を落としてまでホモ・サピエンスのゲノムの複製の数を増やそうと(子孫を増やす)するのか？ 誰もそんな取引に同意したわけではなかった。これこそ、農業革命の罠だった。

贅沢の罠

ホモ・サピエンスは7万年ほど前に中東に到達した。その後の5万年間、祖先はそこで農耕をせずに繁栄した。そのあたりの天然資源は、その人口を十分に支えられた。潤沢な時期には人々は少し多く子供を生み育てた。欠乏の時期には、逆に子供の数が減った。他の哺乳動物と同じで、人類は繁殖を制御するのを助けるホルモンや遺伝子の仕組みを持っている。

自然の人口制御に、文化的な仕組みが加わった。育児のため子供と子供の年齢の間隔を3~4年としたり、性的禁欲、妊娠中絶、間引きといった方法も取られた。

およそ1万8千年前、最後の氷河期が終わって温暖化の時代が始まった。この新しい気候は、中東の小麦その他の穀類には理想的で、それらが増えて、一気に拡がった。…人間が森や藪を焼き払った時にも、それが小麦に有利に働いた。

最初のうちは収穫期に4週間ほど野営をしていたかも知れない。2・30年すると、小麦が増えて拡がり、収穫の野営も5週間、6週間と延び、ついには永続的な村になった。

ナトゥーフ人は何十もの野性種を食べて暮らしていた狩猟採集民だが、永続的な村落に住み、石造りの家や穀倉を立てた。野性の小麦を刈り取るための石の鎌や、小麦を挽くための石のすりこぎとすり鉢などの新しい道具を発明した。

[ナトゥーフ文化 - Wikipedia](#)

野性の小麦を採集していた人と、栽培化した小麦を育てていた人とは、単一のステップで隔てられていたわけではない。農耕への決定的な移行がいつ起こったかを正確にいうのは難しい。

永続的な村落に移り、食料の供給量が増えると、人口が増え始めた。食べさせなければならない人が増えたので、余剰の食物はたちまち消えてなくなり、さらに多くの畑で栽培を行わなければならなくなった。人々が病気の蔓延する定住地に住み、子供が母乳よりも穀類を摂取する量が増え、どの子供も兄弟で競い合っておかゆを手に入れようとするうちに、子供の死亡率が急上昇した。農耕社会では、少なくとも三人に一人が20歳になる前に命を落とした。死亡率の増加を出生率の増加が上回り、人類はさらに子供を生み続けた。紀元前8500年にエリコに住んでいた平均的な人の暮らしは、同じ場所に紀元前9500年前に住んでいた平均的な人の暮らしより厳しかった。…皮肉にも一連の「改良」はどれも生活を楽にするためだったはずなのに、農耕民の負担を増やすばかりだった。このような致命的な計算違いは人々が、自らの決定がもたらす結果の全貌を捉え切れないからだ。

子供におかゆを食べさせ、母乳を減らせば、免疫系が弱くなること、永続的な定住地が感染症の温床となるだろうことを理解していなかった。…豊作の年に穀倉が膨れ上がれば、盗賊や敵がそれに誘われて襲ってきかねないので、城壁の建設と見張り番を始めることも見越せなかった。

それでは、もくろみが裏目に出た時、人類はなぜ農耕から手をひかなかったのか？一つには小さな変化が積み重なって社会を変えるまでには何世代もかかり、社会が変わったころにはかって違う暮らしをしていたことを思い出せる人が誰もいなかったからだ。人口が増えたために引き返せなかったこともある。後戻りは不可能になった。より楽な暮らしを求めたら、大きな苦難を呼び込んでしまった。それはこのとき限りのことではなく、苦難は今日も起こる。

歴史の数少ない鉄則の一つに、贅沢品は必需品となり、新たな義務を生じさせるというものがある。私たちは過去数十年間に、洗濯機、電気掃除機、食器洗い機、電話、携帯電話、コンピューター、電子メールなど、時間を節約し、生活にゆとりをもたらしてくれるはずの無数の発明をした。前よりもゆとりある生活を送っているだろうか？贅沢の罠の物語には、重要な教訓がある。より楽な生活を求める人類の探求は、途方もない変化の力を解き放ち、世界を変えた。古代の狩猟採集民は焼けつくような炎天下での水汲みをする羽目になった。

聖なる介入

1995年、トルコ南東部のギョペクリ・テペと呼ばれる場所で発掘が始まった。最も古い層では定住地や家、日常的活動の形跡は全く見られなかった。ところが、彫刻を施した石柱からなる記念碑的構造物がいくつも出てきた。最大7トン、高さ5メートル、削りかけの石柱は50トン、全部で10を越えた。

イギリスのストーンヘッジは紀元前2500年にさかのぼり、発展した農耕社会で建設された。ギョペクリ・テペの構造物は紀元前9500年ごろにまでさかのぼり、得られる証拠はみな狩猟採集民が農耕社会以前に建設したことを示している。狩猟採集社会がなぜそのような構造物を建設したのか？それらには明白な実用目的はなかった。それが何であるにせよ、狩猟採集民は莫大な手間と暇をかける価値があると考えたのだ。そのような事業を維持できるのは、複雑な宗教的、あるいはイデオロギー的体制しかない。

ギョペクリ・テペには他にもっと驚く秘密があった。遺伝学者は栽培化された小麦の紀元をたどっていた。最近の発見からは、栽培化された小麦の少なくとも一種ヒツブコムギの起源がギョペクリ・テペから約30キロの丘陵にあること。ギョペクリ・テペの文化的中心地は、人類による最初の小麦の栽培化や小麦による人類の最初の家畜化に結びついている可能性が高い。ギョペクリ・テペの遺跡はまず神殿が建設され、その後、村落が周辺に形成されたことを示している。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ギョペクリ・テペ>

革命の犠牲者たち

狩猟採集民は餌食にしていた群れの構成を少しずつ変えていった。農耕民によって家畜化されたニワトリと牛はこれまで生を受けた生を受けた生き物の中で、極端なまでに惨めなものではないか。野性のニワトリの自然な寿命は7～12年くらい、牛の場合は20～25年。自然界ではほとんどのニワトリと牛はそれよりも前に死んだとはいえ、まずまずの年月を生きる見込みは十分あった。

牛やヤギ、ヒツジは子を生んだ後、子の授乳期間だけ乳をだす。農民は動物たちに乳を出し続けさせるために、子を生ませる必要がある。歴史を通じて広く取られてきた方法は、生まれた直後にあっさり子を殺し、母親から搾れるだけ乳を搾り取り、それからまた妊娠させた。

すべての農耕社会が家畜に対して残酷だったわけではない。羊毛を取るために育てられたヒツジ、ペットの犬や猫、軍馬や競走馬は、快適な環境を享受することが多かった。

とはいえ、ヒツジ飼いではなく、ヒツジの立場に立てば、家畜化された動物の大多数にとって、農業革命は、恐ろしい大惨事だったという印象は免れない。

第6章 神話による社会の拡大

農業革命で人類は繁栄と進歩への道を歩みだした主張する支持者がいる一方、地獄行きにつながったと言う人もいる。農業革命を境にサピエンスは自然との親密な共生関係を捨て去り、強欲と疎外に向かってひた走りに走り始めたという。たとえ、その道がどちらに向かっていようと、もはや、引き返すことは出来なかった。農耕へ移行する前の紀元前1万年前、地上に放浪の狩猟採集民が

500万～800万ほどいた。8千年後の1世紀には狩猟採集民は100万～200万しか残っておらず、それをはるかに上回る2億5000万もの農耕民が世界各地で暮らしていた。

農耕民の住宅は、木、石、泥で出来た間口も奥行きも数メートル程度の狭苦しい構造物だった。典型的な農耕民はその構造物に対して、非常に強い愛着を育んだ。これは広範に影響の及ぶ革命で、その影響は建築上のものであると同時に、心理的なものでもあった。以後、「我が家」への愛着と、隣人たちとの分離は、以前よりもずっと自己中心的なサピエンスの心理的特徴となった。新しい農耕民の縄張りは、古代の狩猟採集民の縄張りよりもはるかに狭かっただけでなく、はるかに人工的でもあった。農耕民は周囲の未開地から苦勞して切り分けた人工的な人間の「島」に住んでいた。

地球の地表はおよそ5億1000万平方キロメートルあり、そのうち、陸地は1億5500平方キロメートルが陸地。西暦1400年になっても、農耕民の大多数は、彼らの動植物とともに、わずか1100万平方キロメートル、地表の2%に身を寄せ合っていた。この2%の地表が歴史の展開する舞台だった。

未来に対する懸念

狩猟採集民はたいがい、翌週や翌月のことを考えるのに時間をかけたりしなかった。だが、農耕民は、想像の中で何年も何十年も先まで、楽に思いを馳せた。狩猟採集民が未来を考慮に入れなかったのは、その日暮らして、食べ物を保存したり、所有物を増やしたりするのが難しかったからだ。とはいえ、ショヴェやラスコーの洞窟壁画の描き手たちが何世代も後まで自らの作品を残すつもりだったことは確実だろう。社会的同盟や政治的対立は長期的なものだ。恩恵に報いたり、不当な行為に報復したりするには何年もかかることが多かった。

[ショーヴェ洞窟 - Wikipedia](#)

未来の懸念は、季節の生産周期だけでなく、農耕につきまとう不確実性にもあった。農耕が始まったそのときから、未来に対する不安は、人間の常態となった。農耕民の心配の種が多かったからだけでなく、それに対して何かしら手が打てたからでもある。農耕のストレスは広範な影響を及ぼした。そのストレスが、大規模な政治体制や社会体制の土台だった。農耕民の余剰食料が政治や戦争、芸術、哲学の原動力になった。悲しいかな、勤勉な農耕民は、なんとしても手に入れようと願っていた未来の経済的安定はできず、支配者やエリート層が台頭し、農耕民の余剰食料で暮らした。

想像上の秩序

農耕民が生み出した余剰食糧と新たな輸送技術が組み合わさり、やがて次第に多くに人が、最初は大きな村落に、続いて町に、最終的には都市に密集して暮らせるようになった。それらの村落や町や都市はすべて新しい王国や商業ネットワークによって結びつけられた。

歴史上の戦争や革命の大半を引き起こしたのは食料不足ではない。フランス革命の先頭にたったのは飢えた農民ではなく、豊かな法律家たちだった。1991年、ユーゴスラヴィアは住民全員を養って余りある資源をもっていたにも関わらず、分裂して恐ろしい流血状態になった。こうした惨事の根本には人類が数十人からなる小さな生活集団で何百万年も進化してきたという事実がある。数千年間では大規模な協力のための本能が進化するには短すぎた。

そのような生物学的本能が欠けているにもかかわらず、狩猟採集時代に何百もの見知らぬ人どうしが協力できたのは、彼らが共有した神話のおかげだ。神話は誰一人想像できなかったほど強力だった。

紀元前8500年ごろ、世界で最大級の定住地はエリコのような村落で、数百人が住んでいた。紀元前7000年代には、アナトリアの町の住民は5000～1万を数えた。紀元前5000年代、紀元前4000年代には肥沃な三日月地帯には都市が続々と出来た。紀元前3100年にはナイル川下流域全体が統一され、最初のエジプト王国となった。紀元前1000年から紀元前500年にかけて、中東初期の巨大な帝国が現れ始めた。紀元前221年、秦朝が中国を統一し、その後まもなくローマが地中海沿岸を統一した。

[エリコ - Wikipedia](#)

エジプトやローマ帝国で機能していた「大規模な協力のネットワーク」についてバラ色の幻想を抱いてはならない。「協力」というととても利他的に聞こえるが、自発的とは限らないし、平等主義に基づいていることはめったにない。協力のネットワークの大半は、迫害と搾取のためにあった。古代都市の協力のネットワークは「想像上の秩序」だった。それらを維持していた社会規範は、しっかり

根付いた本能や個人的な面識ではなく、共有された神話を信じる気持ちに基づいていたのだ。

紀元前1776年のバビロンは、世界最大の都市で、臣民の数が100万を越える帝国だった。バビロニアの王、ハンムラビの名前を冠したハンムラビ法典は文書に負うところが多い。これは法律と判決をあつめたもので、公正な王の役割モデルとして、バビロニア帝国全土における画一的な法制度の基盤として、未来の世代に正義とは何か、公正な王はどう振る舞うかを教えることを目的とした。

この法典は、家族の中にも厳密なヒエラルキー(序列)を定めている。子供は独立した人間ではなく、親の財産だった。高位の男性が別の高位の高い男性の娘を殺したら、罰として殺害者の娘が殺される。殺人者は無傷のまま、無実の娘が殺される。 [バビロン - Wikipedia](#)

ハンムラビ法典はこのように宣言する。 [ハンムラビ法典 - Wikipedia](#)

有能な王ハンムラビが打ち立て、この地を誠の道と正しい生き方に沿って進ませよう命じた。エンリル神によって我にゆだねられ、マルドゥク神によって導くように任された人民に対し、我は軽率であったことも怠慢であったこともかってない。

ハンムラビの死後約3千500年後、北アメリカにあったイギリスの植民地の住民はもはやイギリス国王の臣民ではないと宣言した。彼らの独立宣言は、普遍的で永遠の正義の原理を謳った。それらの原理はハンムラビのものと同様に神の力が発端になっていた。アメリカ合衆国の独立宣言には、こうある。

我々は以下の事実を自明のものに見なす。万人は平等に造られており、奪うことのできない特定の権利を造物主によって与えられており、その権利には、生命、自由、幸福の追求が含まれる。

アメリカの礎となるこの文書は、ハンムラビ法典と同じで、もし人間がこの文書に定められていた神聖な原理に即して行動すれば、龐大な数の人民が効果的に協力して、公正で繁栄する社会で安全かつ平和に暮らせることを約束している。

これら二つの文書は私たちに明かな矛盾を突き付ける。どちらもともに、普遍的で永遠の正義の原理を略述するとしているものの、アメリカ人によれば、すべての人は平等なのに対し、バビロニア人によれば、人々は明らかに平等ではないことになる。ハンムラビもアメリカの建国の父たちも、現実には平等あるいはヒエラルキーのような、普遍的で永遠の正義の原理に支配されていると想像した。そのような普遍的な原理が存在するのは、サピエンスの豊かな想像力や、彼らが創作して語り合う神話の中だけなのだ。これらの原理には、何ら客観的な正統性はない。

生物学という科学によれば、人々は「平等に造られた」のではなく、「異なった形で進化し、生まれた」ということである。また、「奪うことのできない権利」はなく、「変わりやすい特徴」を持つだけ。生物はたえず突然変異を起こしており、時とともに「身体器官や身体機能」を完全に失うかもしれない。「想像上の秩序」は邪悪な陰謀や幻想ではない。むしろ、多数の人間が効果的に協力するための、唯一の方法なのだ。

真の信奉者たち

ハンムラビ法典は神話だと受け入れるのは簡単だが、人権も神話だという言葉は聞きたくない。自然の秩序は安定した秩序だ。重力が明日働かなくなるということはない。それと対照的に、想像上の秩序はつねに崩壊の危険をはらんでいる。

1860年にアメリカ国民の過半数が、アフリカ人奴隷は人間であり、したがって自由という権利を享受してしかるべきだと結論したとき、南部諸州を同意させるには、血なまぐさい内戦を必要とした。

キリスト教は聖職者の大半がキリストの存在を信じられなかったら2000年も続かなかった。アメリカの民主主義は大統領と連邦議会議員の大半が人権の存在を信じられなかったら250年も続かなかっただろう。近代の経済体制は、投資家の大半が資本主義の存在を信じられなかったら、一日も持たなかっただろう。

脱出不能の監獄

キリスト教や民主主義といった想像上の秩序の存在を人々に信じさせるにはどうしたらいいのか？ まず、その秩序が想像上のものだと決して認めてはならない。社会を維持している秩序は、偉大な神々、あるいは自然の法則によって生み出された客観的実体であると、つねに主張する。

また、人々を徹底的に教育する。生まれた瞬間から想像上の秩序の原理をたえず叩きこむ、それらの原理はありとあらゆるものに取り込まれている—おとぎ話、戯曲、歌謡、礼儀作法、政治的プロパガンダ、建築、レシピ、ファッションにも。

人文科学や社会科学は、想像上の秩序が人生というタペストリに一体どのように織り込まれているかを説明するのに、精力の大半を注ぎこんでいる。そこには3つの主要な要因がある。

- a. 想像上の秩序は物質的世界に埋め込まれている。
現代の理想的な住宅は、他人の目から遮られ、最大の自主性を提供できるプライバシーな空間を一人ひとりの子供が持てるように、多くの小さな部屋に分かれている。このような空間で育った人は、自分が「個人」であり、自分の真の価値は外からではなく、内から生じると想像せずにはいられない。
- b. 想像上の秩序は私たちの欲望を形つくる。
人の欲望は誕生時から、支配的な神話によって形つくりされている。今日の西洋人が一番大切にしている欲望は何世紀も前からある、ロマン主義、国民主義、資本主義、人間至上主義の神話によって作られる。
- c. 想像上の秩序は共同主観的である。
私が超人的努力をして自分の個人的欲望を想像上の秩序から解放することに成功してもそれは、私ただ一人のことでしかない。想像上の秩序を変えるには何百万という見ず知らずの人を説得し、協力してもらわねばならない。これを理解するには「客観的(科学的根拠)」、「主観的(信念、信条)」、「共同主観的(世論)」の違いを知らねばならない。

想像上の秩序から逃れる方法はない。監獄の壁を打ち壊して自由に向かっつて脱出したとき、外にはより大きな、広い監獄が走りこむ。

第7章 書記体系の発明

世界中の子犬は喧嘩のような荒らしい遊びのルールが遺伝子にもともと組み込まれている。だが、人間のティンエイジャーはサッカーのための遺伝子を持っていない。それでも他人とサッカーができるのは、誰もがサッカーについて同一のルールを学んだからだ。

同じことがもっと大規模な形で王国、教会、交易ネットワークにも当てはまる。だが、重要な違いはサッカーのルールは比較的単純で、簡素であり、狩猟採集民の生活集団や小さな村落での協力に必要なルールと似ているが、2人でなく何千人、何百万人もがかかわる大規模な協力体制の場合には、一個人の脳では保存や処理ができない龐大な情報を扱い保存する必要がある。

アリやミツバチが大きな社会を安定して維持でき強靱なのは、社会の維持に必要な情報の大半がゲノムにコード化されているからだ。

人間の脳は龐大なデータベースの保存装置としてはふさわしくない3つの理由がある。

第一に脳は容量が限られている。第二に、人は死に、脳もともに死ぬ。第三に、人間の脳は特定のデータしか処理できない。

紀元前3500年～3000年、名も知れぬシュメール人の天才が、脳の外で情報を保存して処理するシステムを発明した。このデータ処理システムは「書記」と呼ばれる。

「クシム」いう署名

書記とは、記号を使って情報を保存する方法だ。初期の段階では書記は事実と数に限られていた。最初期のメッセージには「2万9086 大麦 37ヶ月 クシム」などと書かれていた。

シュメールの初期の書記は完全な書記体系ではなく不完全な書記体系だった。

完全な書記体系とは話し言葉をおおむね完全に記録できる記号の体系を意味する。

シュメール人の最初期の書記体系は、現在の数学の記号や楽譜と同じで、不完全な書記体系だ。

数学的な書記体系を使えば計算はできるが、愛の詩を書くことは出来ない。

コロンブスがアメリカ大陸に到来する以前のアンデスの文化など、一部の文化はその歴史を通して不完全な書記体系しか使わず、その書記体系の制約に臆することなく、完全な書記体系の必要性を感じることもなかった。これをキープ(結縄・けつじょう)と呼ぶ。それぞれのキープは色の異なる多くの

縄から成っていた。色の異なる縄と異なる結び目の位置の組み合わせによって、税の徴収や財産の所有権に関する多くの数理データを記録出来た。スペインが南アメリカを征服した直後はスペイン人自信が帝国を治めるの仕事にキープを使った程だった。 [結縄 - Wikipedia](#)

官僚制の驚異

メソポタミア人はやがて、単調な数理データ以外のものも書き留めたいと思い始めた。紀元前2500年までには、王は楔形文字を使って命令を出し、神官は神託を記録し、身分の高くない民たちは個人的な手紙を書くようになった。紀元前1200年頃には中国で、紀元前1000~500年頃には中央アメリカでそれぞれ別の書記体系が発達した。

完全な書記体系は、各地に拡がり、さまざまな新しい形を取り、斬新な役割を担うようになった。人々は詩歌や歴史書、伝奇物語、戯曲、預言、料理本などを書き始めた。ヘブライ聖書(旧約聖書)、ギリシャの『イリアス』、ヒンドゥ教の『マハーバーラタ』、仏教の三蔵(経蔵、律蔵、論蔵)はすべて、もともと口承作品だった。税の記録簿と官僚制はどちらも不完全な書記体系とともに生まれ、結合双生児のように、今日まで分かちがたく結びついたままである。

記録を粘土板に刻みつけるだけでは、効率的で正確な便利なデータ処理が保障されるわけではないことは明らかだ。そうした処理には、目録の整理方法や、複写の方法、コンピューターのアルゴリズムの様な迅速で、正確な検索の方法の使い方を知っている文献管理責任者が必要とされる。シュメールが際立っているのはこれらの技術を開発しながら、筆写者や整理係、文書管理責任者、会計士のための学校にも投資したことだ。

書記体系が人類の歴史に与えた最も重要な影響は、人類が世の中について考えたり、世の中を考えたりする方法を、徐々に変えたことだ。自由連想と網羅的思考は、分類と官僚制に道を譲った。

数の言語

ある決定的に重要な進展が9世紀より前に起こった。新しい不完全な書記体系が発明され前代未聞の効率性をもって数理データを保存したり、処理したりできるようになった。この記号はインド人が発明したイにもかかわらず、アラビア数字と呼ばれる。アラビア語、ヒンディー語、英語、ノルウェー語であれ、ほぼすべての国、企業、組織機関がこの数理的書記体系を使って、データを記録し、処理をしている。数理的書記体系に翻訳できる情報はすべて、信じがたい速度と効率で保存し、普及させ、処理できる。

だが、話はここで終わらない。人工知能の分野は、コンピューターの二進法の書記体系だかけに基づいた新しい種類の知能を生み出そうとしている。『マトリックス』や、『ターミネーター』といったSF映画は、二進法の書記体系が人類の軛(くびき)をかなぐり捨てた日のことを描いている。反乱を起こしたこの書記体系を人類が再び手なずけようとしたとき、この書記体系はそれに反発し、人類を一掃しようと試みる。

第 8章 想像上のヒエラルキーと差別

農業革命移行の何千年もの人類史を理解しようと思えば、最終的に一つの疑問に行き着く。人類は大規模な協力ネットワークを維持するのに必要な生物学的本能を欠いているのに、自らをどう組織してそのようなネットワークを形成したのか。答えは、人類は想像上の秩序を生み出し、書記体系を考案することによって、である。これらの二つの発明が、私たち生物学的に受け継いだものに空いていた穴を埋めたのだ。 [ヒエラルキー - Wikipedia](#)

ハンムラビ法典は、上層自由人、一般自由人、奴隷という序列を定めている。アメリカ人が1776年に打ち立てた想像上の秩序は、万人の平等を謳いながら、やはりヒエラルキーを定めた。自由人と奴隷、白人と黒人、富める者と貧しい者の間の区別は、虚構に根差している。だが、想像上のヒエラルキーはみな虚構を起源とすることを否定し、自然で必然のものであると主張するのが、歴史の鉄則だ。白人至上主義者に人種的ヒエラルキーについて尋ねれば、人種間の生物学的違いに関する似非科学的な講義を聞かされ、頑固な資本家に富のヒエラルキーについて尋ねれば、能力の客観的に発する避けようのない結果だというだろう。たいていの人は、自分の社会的ヒエラルキーは自然で公正だが、他の社会的ヒエラルキーは誤った基準や滑稽な規準に基づいていると主張する。不幸なことに、複雑な人間社会には想像上のヒエラルキーと不正な差別が必要なようだ。

差別ときっぱり決別できた大型社会を学者は一つとして知らない。ヒエラルキーは重要な機能を果たす。ヒエラルキのおかげで、見ず知らずの人どうしが、個人的に知り合うために必要とされる時間とエネルギーを浪費しなくてもいい。

社会的な差別の形成には生まれつきの能力の違いも関係している。だが、能力や気質の多様性はたいいてい、想像上のヒエラルキーの影響を受けている。たいいていの能力は育み、伸ばしてやらなければならない。また、違う階級に属する人々がたとえ完全に同じ能力を開発しても、異なるルールで勝負しなければならなくなる。同等の成功を収める可能性は低い。

悪循環

あらゆる社会は想像上のヒエラルキーに基づいても、同じヒエラルキーに基づいているわけではない。インドの伝統的な社会はカーストによって、オスマントルコ帝国の社会は宗教によって、アメリカの社会は人種によって分類される。ほとんどの場合、ヒエラルキーは偶然の歴史的事情に端を発し、様々な集団の既得権がそのヒエラルキーに基づいて発達し、何世代もの間に洗練され、不滅のものとなる。

アメリカ大陸における清浄

近代のアメリカでは、悪循環が人種のヒエラルキーを永続させてきた。当時の状況に起因する三つの要因があった。第一にアフリカの方が近く、安く奴隷を輸入できた。第二にアフリカではすでに奴隷市場が出来上がっていた。第三に、黒人の方がマラリヤや黄熱病に対する遺伝的免疫を獲得していた。

時とともに、人種差別は文化のしだいに多くの領域に広がった。アメリカの美的文化は、北人の美を標準に考えられ、色の濃い肌、黒いもじゃもじゃ髪、平たい鼻といった典型的な黒人の特徴は、醜いと思われた。こうした偏見は、想像上のヒエラルキーを人間の意識にさらに深層まで根付かせた。

男女間の格差

社会が異なれば採用される想像上のヒエラルキーの種類も異なる。中世のイスラム教徒にとっては人種はたいいてい意味を持たなかった。既知の人間社会のすべてでこの上ない重要性をもっていたヒエラルキーが一つだけある。性別のヒエラルキーだ。人は自分たちを男女に区分してきた。少なくとも農業革命以後はほとんどどこでも、男性が良い目を見てきた。

中華人民共和国が「一人っ子」政策を実施すると、多くの中国人家庭が相変わらず女の子の誕生を不運と見なした。生まれたばかりの女の子を遺棄したり、殺したりする親さえときおりいた。

多くの社会では、女性は男性の財産に過ぎなかった。男女の区分は、インドのカースト制やアメリカの人種制度のような、想像上の産物なのか、それとも深い生物学的な根を持つ自然な区分なのか？男女間の文化的、法的、政治的格差のうち、明らかに生物学的差異を反映しているものがある。出産はこれまで常に女性の仕事だった。

もともと、性行動は、生殖や、配偶者候補の適正を判断するための求愛儀式として進化した。だが、今では多くの動物が生殖器も性行動も、自分の小さな複製を生み出すこととは無関係の、様々な社会的目的で使っている。ボノボは政治的同盟を強固にしたり、親密な関係を打ち立てたり、緊張を和らげるために性行動をする。それは不自然なのだろうか？

生物学的な性別と社会的・文化的性別

男らしさや、女らしさを定義する法律や規範、権利、義務の大半は、生物学的な現実ではなく、人間の想像を反映している。

男性とは、彼が属する社会における想像上の人間の秩序の、特定の位置に収まる人を指す。彼は自分の文化の神話によって、男性の特定の役割(政治への関与など)や、権利(投票権など)、義務(兵役など)を割り当てられる。同様に女性は想像上の人間の秩序におけるメスの成員を指す。

男性のどこがそれほど優れているのか？

農業革命以後、ほとんどの人間社会は、女性より男性を高く評価する家父長制社会だった。社会が「男性」と「女性」をどのように定義しようが、男性であるほうが常に優っていた。エジプトの

クレオパトラ、中国の武則天、イングランドのエリザベス一世などのようは例外である。家父長制度は政治の大変動や社会革命、経済の劇的変化にしぶとく生き延びてきた。何か普遍的な生物学的な理由があって、ほぼすべての文化で男らしさの方が重んじられた可能性が高い。しかし、その理由は説として山ほどあるが、納得できるものは一つもない。

筋力

最も一般的な説は、男性の方が女性よりも強く、女性を無理やり服従させたというもの。この説に無理があるのは、男性が強いのは特定の強さであり、女性の方が飢えや病気、疲労には強い。また、歴史を通して、女性は体力を使わない仕事(聖職、法律、政治)から除外され、体力を使う畑仕事、工芸、家事など肉体労働に従事してきた。人間社会では体力の強さと社会的権力とは正比例しない。むしろ、反比例する場合が多い。

攻撃性

男性優位は強さではなく攻撃性に由来するという説もある。戦時には、男性が軍を支配するので、一般社会も男性が支配してきた。続いて彼らは一般社会の支配権を利用してさらに多くの戦争をし、戦争の数を重ねるほど、彼らによる支配権も増していった。このフィードバックループ(循環作用)によって、戦争の偏在と家父長制の偏在の両方が説明できる。

女性は身体的に弱かったから、テストステロン値が低かったから、官吏や将軍、政治家として成功出来なかった。というのは筋が通らない。

女性は男性よりも人を操ったり宥めたりするのが得意であると見られがちで、他者の立場で物事を眺めたりする能力が優れているという定評がある。にもかかわらず、実際に女性が秀でた政治家や帝国建設者になることは希だった。それがなぜだか全くわからない。

家父長制の遺伝子

生物学的説明の第三種類は、野獣のような力や暴力は重視せず、何百万年もの進化を通して、男性と女性は異なる生存と繁殖を発達させたという。子供を生む能力のある女性を孕ませる機会を求めて男性が競い合う状況で、個体が子孫を残す可能性は、他の男性を凌いだり打ち負かせたりする能力にかかっていた。最も野心的で、攻撃的で、競争的な男性の遺伝子が増えていった。

人間の女性は子育てに男性の力が必要であったとするが、他の動物では他者に依存するメスと、競争的なオスとの間のダイナミクスが家母長制につながる。これがボノボやゾウで可能なら、なぜホモ・サピエンスでは可能にならないのか？ 家父長制が生物学的事実ではなく根拠のない神話に基づいていないのなら、この制度の普遍性と永続性をどうやって説明したらいいのか？

農業革命が引き起こした人口増大は現代の環境問題の根源となっているように思います。
人口問題はカトリック社会だけでなく、現代社会の倫理的な課題になっています。
日本では少子高齢化が社会問題となっている現在も同じようなことが起きています。

建築、デザインの様々な課題も深層では、認知革命と農業革命の影響を大きく受けていると思います。

旧約聖書の「創世記」に出てくるカイン(農業者)とアベル(遊牧者)の話からゾロアスター教(拝火教)の教義を連想しました。

[カイン - Wikipedia](#)

[ゾロアスター教 - Wikipedia](#)

家父長制については、日本の「商家」と「武家」の「家」制度を考えました。
社会的ヒエラルキーについては日本の「士農工商」の功罪について考えました。

皆さんはどのようにお考えになりますか？ ご意見、ご感想をお送り下さい。

T.K.